

日本畫科荒木教授筆（孔雀）同川端教授筆（水墨山水）前者は頗る俗氣を帯び人をして倦厭の情を起さしめ後者は稍々觀るに足ると雖ども教授の筆としては未だし彫刻科竹内教授の（後）（技藝）不感服の作となす 今回の列品例年に比し概して活氣を欠き甚だ見劣りするの感あり こはさきに同校教授の更送ありしがその一大原因となりしものなるべけれども今にして大に奮起する所なくんば同校の前途頗る杞憂に堪へざるものあるを覺ゆるなり（影法師〔正宗白鳥〕）

⑦ パリ万国博覽会に向けて

明治三十二年八月二十一日、本校の川端玉章、高村光雲、黒田清輝、長沼守敬、浅井忠、石川光明、久米桂一郎、合田清、大村西崖ら教官は臨時博覽会鑑査官を命ぜられた。翌三十三年にパリで開催された万国博覽会への出品物の鑑査のためであった。

この博覽会を機に本校では久米桂一郎、黒田清輝、岩村透、合田清、海野美盛らが渡仏し、また、浅井忠もこの時期にパリへ留学する。多くは翌三十三年春に出発しているが、三十二年秋には久米の休職・渡仏、浅井忠のヨーロッパ留学が決定したため、特に西洋画科では渡仏の氣運が急速に高まった。左記の新聞記事はその氣運を伝えるものである。

○よみうり抄

◎東京美術學校教授送別會 東京美術學校教授久米桂一郎氏へ出品協會の用事を帯びて來月六日に同浅井忠氏へ歐洲留學を命ぜら

れて來年一月に同合田清、海野美盛氏へ自費を以て同一月に巴里へ赴くに付川端玉章、高村光雲、黒田清輝、長沼守敬、大村西崖の五氏發起となり本日上野精養軒に盛なる送別會を開く筈◎新海海野両氏 新海竹太郎氏も海野氏同道自費にて佛國へ赴くに付東京彫工會へ二氏に巴里博覽會出品者總代の任務を囑託したり◎教授不在中の美術學校 久米氏請持の西洋考古學へ大村西崖氏引繼ぎ、同木炭畫教室へ黒田清輝氏監督し、浅井氏の風俗寫生室も黒田氏が預りしに付小林萬吾氏西洋畫教室助手を命ぜられて之を補助し、合田氏の佛語ハ其實兄たる田島陸軍大佐之を引請けたり（田島忠親）但し海野氏受持の分ハ海野勝珉、平田宗幸氏あれバ別に補員せず〔實際の渡航時期はこの記事と同一ではない。―編者註〕

（明治三十二年十一月二十七日『読売新聞』）

久米桂一郎は明治三十二年十一月五日に休職。以後復職までの事歴は本學所蔵の久米の履歷書に次のように記されている。

〔明治三十二年〕十一月廿四日 美術上研究ノ爲本年十二月ヨリ

凡向一ヶ年間佛國へ私費渡航ノ件文部大臣へ願濟

十二月二日出發ス

明治卅二年十一月廿四日 佛國滯在中美術教育取調ヲ囑託ス 文

部省

十二月十七日〔註〕臨時博覽會鑑査官被免 内閣

同三十三年 佛國巴里萬國博覽會ニ油畫ヲ出品シ賞狀ヲ受ク

同卅四年三月 日ヨリ伊太利國ミラン、チュラン、ピサ、羅馬、

ナール、シエナ、フロランス、ヴェニス、獨逸國ミュニッ
ク、コロンニュ、和蘭國ハーゲ、アムステルダム及英國倫敦ヲ
回歴シ各地ノ美術ヲ研究ス

五月十五日 佛國ヨリ歸朝

五月廿九日 復職ヲ命ス 文部省

ただし、十二月二日出発とあるのは新橋駅を汽車で発った日付で
あり、『黒田清輝日記』第二卷（昭和四十二年。中央公論美術出版）に
よれば、この日、久米は校長、職員、生徒、友人、親戚等多数の見
送りを受けて黒田清輝および友人達とともに乗車し、横浜で下車。
予定の乗船切符がとれず、翌日また黒田と汽車に乗り、大磯で乗り
代えて四日に京都有着。以後、黒田の美術工芸取調べに同行し、七日
に京都を汽車で発って長崎に向かい、長崎から仏船オセアニアン号
に乗って出発した。

次に、明治三十二年十一月十五日、本校は「NOTICE SUR
L'ÉCOLE DES BEAUX-ARTS DE TOKYO」（限定本、非売品）
を発行した。これはパリ万国博に文部省出品物の一つとして出品す
るために編集されたもので、校舎や各科教室風景および教官や生徒
の作品を多数掲載し、仏文の解説が付けられている。本学附属図書
館にも一冊所蔵されている。これについて当時の新聞が次のように
報じている。

○美術通信

△△生 「この分大村西崖執筆」

△東京美術學校にては、來る三十三年佛國巴里博覽會へ出品す
るに、經費僅に千圓ばかりにして製作品にては迎も目覺しきもの
出來ざるより、文部省と協議の末同校總覽といふ一書を編纂し、
寫眞版百五十圖を挿み、佛文にて精しくその成績現況等を記述し
て出陳する筈なり、こは陳列のうへ目に立たずとて非難するもの
あれど、此經費にて同校教育の全體を示すには、これに過ぎたる
良策なかるべしと久保田同校長心得は語りぬ

（明治三十二年四月十九日『時事新報』）

○美術學校一覽 東京美術學校が巴里大博覽會の出品へ同校開
始以來の歴史を敘したる書籍にて生徒の製作品中優等のものを刷
出する事一百餘、題して東京美術學校一覽と云ふ、昨今和文脱稿
し更に佛文に譯して來る八月中に成功する都合のよし

（明治三十二年六月十一日『読売新聞』）

⑧ 和田英作の留学

明治三十年七月西洋画科撰科を修了し、同科教場助手（無給）とな
って油画の研究を続けていた和田英作は、岡田三郎助と一緒に国費
留学させるといふ文部省の約束が果たされなかったので、ひたすら
渡欧の機会を待っていたが、黒田清輝の紹介でベルリン博物館のア
ドルフ・フィッシャーとその夫人（同三十一年來日）の日本旅行の案
内をつとめたことが縁となって、その蒐取品の整理のために同三十
二年五月渡欧した。滞欧中に国費留学生任命の手続きをとるといふ
黒田清輝や文部省専門学務局長上田万年の約束があったのである。